



DOON UNIVERSITY, DEHRADUN
End Semester Examination, December 2017
School of Languages

M.A. Integrated Japanese (9th semester)
Course: SLJ 502 Reading Japanese Literary texts I

Time Allowed: 3 Hours

Maximum Marks: 50

Note: Attempt All Questions from Section A, B and C.

Section A: 1000字以内に答えなさい。

点: $2 * 6 = 12$

Q.1 自分が好きな作家について書きなさい。

- 芥川龍之介 や 有島武雄

II 芥川龍之介に書かれた「世の中と女」のまとめを書きなさい。

Section B: 1000字以内に答えなさい。

点: $5 * 4 = 20$

Q.2 一郎は山猫からはがきをもらって何をしたか。

Q.3 「どんぐりと山猫」と言う話にはどんな裁判が行われていたか。

Q.4 二つの道は人の歩むに任せてある。右を行くも左を行くもともに人の心のままである。ままであるならば人は右のみを歩いて満足してはいない。また左のみを辿って平然としていることはできない。」この文章の意味を説明しなさい。

Q.5 宮沢賢治に書かれた「女」の感想文を書きなさい。

Section C: 英語で翻訳しなさい。

点: $6 * 3 = 18$

Q.6 僕に東京の印象を話せといふのは無理である。何故といへば、或る印象を得るためには、印象するものと、印象されるものとの間に、或る新鮮さがなければならぬ。ところが、僕は東京に生れ、東京に育ち、東京に住んでゐる。だから、東京に対する神経は麻痺し切つてゐるといつてもいい。従つて、東京の印象といふやうなことは、んど話すことがないのである。

しかし、こゝに幸せなことは、東京は変化の激しい都会である。例へばつい半年ほど前には、石ののあつた京橋も、このごろでは、西洋風の橋に變つてゐる。そのために、東京の印象といふやうなものが、多少は話せないわけ

でもない。殊に、僕の如き出不精なものは、それだけ変化にも驚き易いから、幾分か話したねも殖えるわけである。

Q.7

そこで山猫は、黒い縹子の服をぬいで、額の汗をぬぐひながら、一郎の手をとりました。別当も大よろこびで、五六ぺん、をひゆうぱちつ、ひゆうぱちつ、ひゆうひゆうぱちつと鳴らしました。やまねこが言ひました。

「どうもありがたうございました。これほどのひどい裁判を、まるで一分半でかたづけてくださいました。どうかこれからわたしの裁判所の、名誉判事になつてください。これからも、葉書が行つたら、どうか来てくださいますか。そのたびにお礼はいたします。」

「承知しました。お礼なんかいりませんよ。」

「いゝえ、お礼はどうかとつてください。わたしのじんかくにかゝりますから。そしてこれからは、葉書にかねた一郎どのと書いて、こちらを裁判所としますが、ようございますか。」

一郎が「えゝ、かまひません。」と申しますと、やまねこはまだなにか言ひたさうに、しばらくひげをひねつて、眼をぱちぱちさせてゐましたが、たうとう決心したらしく言ひ出しました。

Q.8

人はいろいろな名によってこの二つの道と呼んでいる。アポロ、ディオニソスと呼んだ人もある。ヘレニズム、ヘブライズムと呼んだ人もある。Hard-headed, Tender-hearted と呼んだ人もある。霊、肉と呼んだ人もある。趣味、主義と呼んだ人もある。理想、現実と呼んだ人もある。空、色と呼んだ人もある。このごときを数え上げることの愚かさは、針頭の立ちうる天使の数を数えんとした愚かさにもった愚かさであろう。いかなるよき名を用いるとも、この二つの道の内容を言い尽くすことはできまい。二つの道は二つの道である。人が思考する瞬間、行為する瞬間に、立ち現われた明確な現象で、人力をもってしてはとうてい無視することのできない、深奥な残酷な実在である。